

電子版で朝刊読めます

スマホで！タブレットで！パソコンで！
紙面を丸ごと読むことができるサービス、
「どうしん電子版」！購読料プラス0円

「どうしん電子版」は、道新を月決め料金で定期購読している方なら、無料で登録できる電子版会員限定のサービスです。

お問い合わせは
0120-889-104

紙面文字が大きくなりました！

1月号よりねっとわーく屈足の誌面文字が大きくなりました。読みやすく皆様に親しまれますようにこれからも努力いたします。
ねっとわーく屈足編集室



平成最後の入学式。小学校は新一年生八名と転入生一名を迎え、全校四十五名。今年度も皆様に子ども達を健やかに育てていただけることを期待しております。

さて、五月から令和が始まります。昭和から平成になったとき、私は釧路の大学を卒業し就職浪人中。塾講師契約打ち切り、教員採用ならず。親に内緒で買った車の維持費を稼ぐため、後輩にアルバイトを申し込んでもらっては、「代理です」と働く日々。

そんな中、採用試験の終わった8月、暴風雨の中、愛車で臨時教員の申込に十勝教育局にきました。担当者は熱い方で「悪天候の中、来てくれたんだから、絶対に十勝で臨採を見つけれ。他からの誘いは断って！」と言ってくれました。これが十勝で教員として働くきっかけでした。

畜大生が多く住むアパートの六畳一間で、帯広の小学校の臨時教員生活が始まりました。



「なつぞら好調」令和時代、あなたのドラマ

新得町立屈足南小学校 校長 高 充慶



勤務初日、校長から二か月の雇用となった旨を突然伝えられ、二ヶ月間、参観日、通知表、学習発表会と目が回りました。

ある日曜、保護者の方が自宅に来て、子育ての悩みをお話していかれました。驚きと同時に、こんな若僧を先生として扱ってくれ嬉しく思いました。

その後、熱い担当者のお陰で、すぐに足寄の小学校に勤務。めでたくそこで採用となりました。足寄、鹿追、新得、土幌、芽室、音更と過ごし、屈足も二年目。教職三十年目に平成から令和になります。

新得で撮影された「なつぞら」も好調のよう。誰にでもドラマがあり、他人が見ればたわいのないシーンの連続かもしれませんが、自分にはどのシーンもかけがえのないものです。令和時代、皆様のドラマが、素敵なシーンの連続となることを願っています。

本

当販売所では様々なジャンルの書籍、雑誌、文庫、新書、週刊誌の定期購読など、ほとんど全ての出版物を確実にお取り寄せします。今読みたい話題作！欲しい本をお取り寄せ！

送料無料

せ！気軽にお問い合わせください。通販は送料がかかりますが当販売所は無料です。※当店取り置きとなります。宅配サービスは致しません。

うちち屈足駐在所



佐藤和典 巡査部長

「春の火災予防について」

近隣の市町村で火災事案が多発しています。その原因のほとんどは、ゴミなどを屋外で焼失処分したさいに、草地等に燃え移り、さらには家屋や物置が焼失するというものでした。5月は特に空気が乾燥している時期、屋外で火気を使用することは非常に危険です。また、個人や事業所から出たゴミなどを勝手に燃やして処分するといった行為は、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律違反」という罪に問われます。

どんなゴミでも、どんなに少なくても、勝手に燃やして処分することは違法行為となりますので、ゴミは必ず町で指定された方法で処分して下さい。

ゴミを不法に投棄することも違反です。この屈足からは火災を発生させない、ゴミの不法投棄がない、きれいな街づくりの皆様の御協力を引き続き宜しくお願い致します。



道新四月号のポケットブックの御案内です。



4月号「かわいいクッキング」近ごろ、見栄えのいい料理が大人気です。キャラ弁を作ったり、料理写真を会員交流サイトに投稿したりする人も増えていきます。料理は、おいしく食べるのももちろん、楽しく作り、楽しめる時代といえるのかもしれない。本誌では、家族や友人から「かわいい」と言われるようなレシピを紹介いたします。宅配済み

次号予告 どうしん電子版活用ガイド お楽しみに。

次号予告 どうしん電子版活用ガイド お楽しみに。

連続小説

加奈子

赤池武臣

そんなことがあつてから加奈子は自分のマンションにちよくちよく好一を呼んでは御馳走(ごちそう)するようになった。

呼ぶ時は必ず少し酔っていた。が以前とは違い、最近の加奈子は酔っていても色艶がよくおおらかで、若々しかった。

そんな加奈子を見て好一は(うちの大家さんは進化した)と笑った。

九時過ぎ...

好一を帰すと加奈子は急に淋しくなる。今まで華やいでいた空気が、風船しぼむように音を立て萎(な)えていく。

飲みかけのコーラを引き寄せ、残り酒を満たすと一息に飲み乾し、仏壇の前で線香に火をつけ長い時間坐る。一人者だという現実が突如として身辺を包み、物音一つしない静かさがその佐しさに追い打ちをかける。

加奈子は逃れるように四つん這(ば)いになり茶の間に行き、琥珀(こほく)色の酒瓶を透かして見ながらかぶりをふるると、元の位置に戻した。加奈子は一度、好一の父親に逢つて見ようと思った。別に理由などなかった。

ただ無性にそう思った。浅い眠りの中をさまよっている時、けたたましく電話のベルが鳴った。

首をねじって枕元の時計を見る。時計は夜中の十一時をさしていた。

漸く眠りかけたのに、と胸にこみ上げてくる熱いものを呑み込み受話器を取った。

「おばさんッ、隣の一年ペが社会人にかまり部屋で殴られながら説教うけているんだ、酔っついていて何を言っているのか解らない。

僕が仲に入って止めてみたけど、こずかれるだけどうにもならない。可愛相だから助けてやってよ、おばさんッ、早く来て...

「またか、また、彼奴(あいつ)だな」。

加奈子はいまましく舌打ちし、すぐ行くぞと鋭く言って電話を切った。

学生の部屋と一般人の部屋は、食堂を挟んで区別しているのだが、時折、炊事場に水飲みに行つてから合うらしい。